
バカとテストと美晴の兄と。

ラドゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと美晴の兄と。

【Nコード】

N8222Z

【作者名】

ラドゥ

【あらすじ】

この話は、個性が豊かすぎる家族を持つ主人公、「清水美樹雄」が送る学園物語である。ただ…
それだけ……。

どうも。最近就活を始めたラドゥです。久しぶりにバカテスを読んでいたら、我慢できずにいつの間にか手が動いてた事実。

…バカテス。恐ろしい子っ！！

まあ、そんなわけで。ラドウ渾身（笑）の三作目。どうぞ。

……………あ、更新はあまり期待しないでね

ブローグ『俺の家族はこんな家族』（前書き）

バカテスを読んでたら、いつの間にか手が動いていました。

…おもしろいですよねえ。バカテス。ギャグ物のラノベなら？1だと自分は思っています。異論は認める（キリッ！

…まあ、就活も始まったんであまり更新できませんが。

それではござ

プロローグ『俺の家族はこんな家族』

ここはとある住宅街のとある部屋。

カーテンからは日の光が漏れ、暗い部屋に光をさしこむ。

チュン チュン チュン チュン

雀の鳴き声が、朝の到来を知らせる。

しかしこの部屋の主である、おそらくは十六、七くらいの年齢である少年は、

「ZZZZZ……。」

いまだに自分のベッドで惰眠を貪っていた。

しかし、それは別段不思議なことではない。朝といっても今の時間は午前5時。少年くらいの年齢なら起きているほうが珍しいのだ。

青年の部屋には大量の本が積み重なっており、この少年がかなりの読書家だということがうかがえる。

少年の眠っているベッドの枕元には一つの写真たてが飾ってあった。

シンプルな意匠の写真たてには、少年をそのまま小さくしたような子供と、ピンク色の髪の毛、ほんわかした雰囲気を持つ女の子。そして、整った顔立ちだがどことなく抜けた雰囲気を持つ男の子が笑顔

で並んで映っている写真が飾ってあった。

写真たてには埃が一切かぶっておらず、少年がこの写真をととても大切にしていることがわかる。

そんな少年の部屋に、

ギイイイイ・・・

何者かが侵入してきた。

「お兄さま」。朝ですわよ・・・。」

ドアをゆっくり開けて入ってきたのは縦ロールをツインテールにしている小柄な少女。どうやらこの少年の妹らしい。

言動から少年を起こしに来たように思えるが、なぜ声を小さくする必要があるのでろうか。

「ふふふ、お兄様はまだ寝ているようですね。」

そういつと少女はゆっくりとベッドに近づくと、少年の顔を覗き込む。

「…………グへへ。お兄様の寝顔はやっぱり可愛いですわねえ。」

どうやら彼女の目的は、少年の寝顔を見ることにあっただようだ。

よほど兄のことが大好きなのだろう。だらしなく頬を緩めてる。

というか、仮にも女の子がグへへって……。

「はあ、やっぱり兄の寝顔を見ることは妹の特権ですわね。本当ならもう起こしたほうがいいのでしょうけど。……せつかくなので、もう少し見ていきましょう」

ジーーーーー

「……」

ジーーーーー

「……」

「ンーーーーー」

「……おい、まで」

部屋に突然聴こえる男性の声。

現在この部屋には寝ている少年と、その寝ている少年にめけて目を瞑って唇を差し出している妹しかいない。

そして聞こえたのは男性の声なわけで、

「あら、起きたんですのお兄様。おはようございますお兄様。」

少女は瞬時に何も無かったように取り繕う。

「ん。おはようさん美晴。ところでお前さん。今なにをしようとしたんだい？」

「あら。今日は入学式のせいで朝がごたつきそうだから、余裕を持って早めに起こしてくれといったのは、お兄様ではないですか。」

「……………そうだったか？」

嘘である。

「ええ。」

「そうか、それはすまなかった。おかげで助かったよ。」

そういつて少年はほほ笑むと、美晴という少女の頭の上に手を乗せ、優しく撫でる。

美晴はそれに気持ちよさそうに目を細める。

「い、いえ。妹として当然の義務ですわ。」

「ははは、そうかそうか。……………で、本当は？」

「寝ている隙についてお兄様の唇を奪おうとしました。（キリ）」

「……………ほっ？」

ガシッ（少年が美晴の頭を掴む音）

ググググ（少年が手に力を込める音）

ミシミシミシ（美晴の頭蓋が悲鳴を上げる音）

「ミギヤアアア!?！」

「そついうことはするなといったよなああ!！」

「ちよっ、お兄様、痛い痛い、いたたたた。ごごご、ごめんなさ
—————い!！」

早朝の住宅街に、少女の声が響き渡った……………。

プロローグ『俺の家族はこんな家族』

「うっうっ……………。まだ頭が痛みますわね。」

「自業自得だ。朝っぱらから変なことをしようとしたお前が悪い。」

ん？おお、…おはよう。画面の向いの皆。

俺がだれかって？

俺の名前は清水美樹雄しみず みきお

今年で高校一年生になる、本を読むのが好きなただの一般人だ。

そして今俺の隣で頭を押さえてるのは清水美晴しみず みはる。

双子の俺の妹だ。それにしても似てないって？まあ、双子といっても二卵性だからしょうがないだろ。

この美晴には、少し困ったところがあったな。

「何をおっしゃいます、お兄様。兄の唇を奪うのは妹の大切な権利です！！」

ゴチンッ

「~~~~…ッ!?!?」

「んなわけねえだろ。ぶん殴るぞ?」

「も、もう殴ってますわ…。」

そう、この美晴。少し、…いや、かなりのシスコンで、気を抜いたら俺に迫ってくるから困る。今朝のなんかまだましなほうで、ときどき入浴中に乱入してきたり、下着姿で俺のベッドの中に潜りこんできたりするから困る。

(なんで、こんな風に育っちゃったんだかねえ……。)
昔はもうちょい普通の子だと思ったんだが。

「あら、今日は2人とも早いわね？」

おっと、この声は。

「おはよう、母さん」

「おはようございます、お母さん。」

「はい、おはよう2人とも。」

そういつて、台所からこちらを覗くのは、清水美智子しみず みちこ。俺と、俺の妹である清水美晴の母親である。

ショートカットの似合う美人だが、一見20代に見えるが、確か今年で、

スパッーン！

「なにか変なこと考えたかしら。」

「ははは んなわけないじゃないですかあ。。」

これから母さんの年齢については考えないようにしよっ……。。

「手伝おうか、母さん？」

これが俺たちの父親である清水孝明。しみず たかあき …まあ、今の言葉でわかるだろうがこの人かなりの親ばかなんだ。特に美晴のことを病的なまでに溺愛している。…まあ、スキンシップが激しすぎて美晴には嫌がられたりするんだが。

とりあえず、

「父さんうるさい。」

「うるさいわよあなた。」

「静かにしなさい、豚野郎。」

「皆、冷たすぎないっ！？特に美晴。僕一応君の父親だよ！？」

「お兄様以外の男性なんて知ったことはありませんわ。」

美晴がそういうと、父さんが人を殺せそうなもの凄い形相で俺のことを睨んでくる。…まあ、父さんは俺のことも大事にしてくれるけど、優先順位は美晴のほうが高いからなあ…。

「おのれ美樹雄…。僕の娘を誑かしたなあ…。」

「んなわけないだろ。とりあえず、…後ろ向いたほうがいいんじゃない？」

「…はっ！」

俺の忠告を聞いてやっと自分の後ろにいる人物の気配を感じたんだ

るづ。おそるおそるふりかえる。

「……………」

「……………」

そこには母さんがもの凄いオーラをだしながら、無言で立っていた。

「ミ、ミチコサン、イッタイドシタンデスカ…？」

「……………あなた。」

「は、はいっ！！」

「美晴を大切に思うのはいいけれど、美樹雄にあたるのはやめなさいといったわよねえ？」

「え、えつと、それはだな…。」

「少しお話ししましょうか…？」

そういつて母さんは父さんの首元を掴むと、ズルズルと俺たちのいるリビングから父さんを引きづりながらでていった。

その途中、父さんが「ドナドナ」を歌ってたのには涙がでてきた…。

「……………」

「……………」

料理が並べられたリビングに取り残された俺と美晴。

……とりあえず、

「飯にするか。」

「そうですね。」

まあ、こんな人たちが俺の家族。

いろいろ大変なこともあります、毎日家族仲良くやっています！！

「……ッま、まって美智子さんッ！さすがに鈍器はダメだと思っただー!?」

「ふふふふ。いつもいつも、暴走ばかりして。あの年頃は繊細なんですから。美樹雄たちがぐれてしまったらどうするんですか……。今日という今日は、その性根を叩き直してあげます。美晴が美樹雄意外の男性に興味を持たないのも、洗濯物が良く乾かないのも、私の化粧ののりが悪いのも、全部あなたが悪いんです……」

プロローグ『俺の家族はこんな家族』（後書き）

どうでしたでしょうか。暇つぶしになれば幸いです。

書き方も少し変えてみたんですが・・やっぱり違和感あるかな。・・

・まあいいか。

ちなみにこの小説は文月学園入学からスタートなので、原作開始まで少し時間がかかります。

…それに就活と、他の連載もあるし。大分遅れるかも…。

それでもいいという人はこれからも生温かい目で見守ってくれたら嬉しいです。

感想に、誤字脱字の指摘、物語の矛盾点など。いろいろお待ちしています。……ただ、あまり激しい悪口なんかはやめてくださいね。自分結構メンタル弱いので…。

それでは、ラドウでした!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8222z/>

バカとテストと美晴の兄と。

2011年12月26日01時47分発行